『スラヴ研究』No. 58（2011）

[研究ノート]

オルタナティブとしてのユーラシア主義

── 言語学者 N. S. トルベツコイによるソ連とナチスへの思想的反応 ──

斎　藤　祥　平

はじめに

亡命者であるユーラシア主義者は、政治のメインストリームになることができなかった敗残者であった。しかし、1920 年代の政治運動としてのユーラシア主義が実らず、1930 年代に結実していった「収斂進化的言語観」─遺伝・系統というタテのつながりではなく環境というヨコのつながりを重視する言語観が、ナチスやソ連の言語観批判であると同時に、より広範に、ナチスやソ連の文化論、民族論、世界観への批判、それらに対するオルタナティブとしてのユーラシア主義の世界観を提示することになった。

N. S. トルベツコイ（N. S. Trubetskoi, 1890–1938）は、オルタナティブとしてのユーラシア主義を典型的に体現していたといっても過言ではない。彼はユーラシア主義がソ連に対して政治的影響力を持てないと早くに悟った一人であった。本稿では、1920 年代前半のボリシェヴィキに対する政治的批判を経て、トルベツコイが言語学者、民族学者としての知識や方法論を生かしてソ連やナチスに学問的に対抗し、「ユーラシア」を提示していく過程を見ていく。最終的には、スターリンとヒトラーによる両全体主義体制の狭間で、彼が政治から学問へとその思想を転換させたことを明らかにすることが本稿の目的である。

これまでのユーラシア主義の歴史研究は 1920 年代を対象にし、ロシア人のアイデンティティとして、特にその政治的側面に光を当てていることが特徴である。この背景にはソ連崩壊後にユーラシア主義がロシア人の新たなアイデンティティとして注目され、ロシアのナショナリズム、及び政治的志向としてネオ・ユーラシア主義が台頭したことがある。その結果、過去のユーラシア主義研究においても、現代的意味を追求するため、その政治的側面が重視された。現在のユーラシア主義研究は、特に N. リャザノフスキーが 1960 年代に提示した見方、ユーラシア主義発生の歴史的・思想的背景の分析に沿い、それを発展させてきた [(1)]。とりわけ M. バッシンは、ロシア帝国に根ざした地理アイデンティティとしての側面を掘り下げた [(2)]。M. ラリュエルは、ユーラシア主義を政治的イデオロギーとして扱ったが、豊富な

1　ユーラシア主義の先行研究としてまず挙げるべきものとして Nicholas Riasanovsky, “Prince N. S. Trubetskoy’s ‘Europe and Mankind’,” *Jahrbucher fur Geschichte Osteuropas* 12 (1964), pp. 207–220; Nicholas Riasanovsky, “The Emergence of Eurasianism,” *California Slavic Studies* 4 (1967), pp. 39–72 があり、草分け的存在となった。

2　Mark Bassin, “Classical Eurasianism and the Geopolitics of Russian Identity,” *Ab Imperio* 2 (2003), pp. 257–267; idem, “Geographies of Imperial Identity,” in Dominic Lieven, ed., *The Cambridge History of Russia* II (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), pp. 45–63.

史料を用い政治哲学、地理アイデンティティ、多義的なオリエンタリズムといった側面から総合的に論じ、現代のネオ・ユーラシア主義と1920年代の古典的ユーラシア主義の関係を分析した[3]。M. ハウナーはロシアのメシアニズム、スラヴ主義およびロシアオリエンタリズムとの比較からパンモンゴリズムとしてユーラシア主義を論じた[4]。

国内の研究としては、特に栗生沢猛夫、米重文樹、そして浜由樹子の研究がある。栗生沢はソ連崩壊以前にユーラシア主義に注目していた草分け的存在であり、初期ユーラシア主義の論文一つ一つを個別的に分析し、ユーラシア主義が本当にロシアの帝国性やヨーロッパ性から逸脱した思想なのかを検討した[5]。米重は、満鉄調査部の嶋野三郎がユーラシア主義の著作を日本語に翻訳し、同時代にユーラシア主義がアジアで満州国成立と関わる現実的な意味を持っていたという欧米の研究とは一線を画する新しい議論を提示した[6]。浜は近年の欧米の研究動向を踏まえ、政治的文脈からトルベツコイとP. サヴィツキー（P. Savitskii, 1895–1968）の西欧文明批判としての共通項を見出し、多種多様なユーラシア主義を一つの運動として捉える本格的なユーラシア主義研究を行っている[7]。浜は、国内初のユーラシア主義に関する単著の中で、この思想を戦間期国際秩序の中に位置づけ、その意義を明らかにすることに成功したが、また同時にユーラシア主義それ自体の政治的イデオロギーとしての限界も指摘している[8]。浜が1920年代の政治論に関してトルベツコイの亡命者としての立場を重視しているのに対し、本稿は学者としての1930年代への展開を重視する。また浜は、トルベツコイの人物紹介および背景について詳述しているものの、彼の思想内容と言語学の関係は十分に分析していない。本稿はこの点を掘り下げる。

先行研究の検討対象が1920年代中心であることは、ユーラシア主義が1920年代後半にソヴィエト・エージェントの介入により政治運動としての意味を失ったことが大きな理由である[9]。1930年代のトルベツコイの活動は一見ユーラシア主義とは別物のようだが、彼は

---

3 Marlene Laruelle, *Russian Eurasianism: An Ideology of Empire* (Washington,D. C.: Woodrow Wilson Center Press, 2008); *Ларюэль М.* Идеология русского евразийства или мысли о величии империи. М., 2004.

4 Milan Hauner, *What Is Asia to Us?: Russia's Asian Heartland Yesterday and Today* (New York: Routledge, 1992), pp. 49–65.

5 栗生沢猛夫「H. C. トルベツコイ『ヨーロッパと人類』を読む」『えうゐ』12号、1983年、80–90頁；栗生沢猛夫「『東方への脱出』：ユーラシア主義の成立」『日本とロシア』1987年、138–148頁；栗生沢猛夫「ユーラシア主義者のロシア民族・文化論― N. S. トルベツコイ『ロシア人の自己認識の問題によせて』をめぐって」『ロシアと日本』第二集、1990年、145–155頁。

6 *Йонэсигэ Ф.* Евразийство на Дальнем Востоке // Japanese Slavic and East European Studies. 1997. № 18. С. 11–34.

7 浜由樹子『ユーラシア主義とは何か』成文社、2010年；浜由樹子「N. S. トゥルベツコイのユーラシア主義：『国民国家』批判の視点に注目して」『スラヴ研究』51号、2004年、63–94頁；浜由樹子「P. N. サヴィツキーのユーラシア主義」『ロシア東欧研究』34号、2005年、122–132頁； HAMA Yukiko, "Russia from a Pan-Asianist View: Saburo Shimano and His Activities," *Ab Imperio* 3 (2010), pp. 227–243.

8 浜『ユーラシア主義とは何か』256頁。

9 ソ連との権力闘争およびユーラシア主義の分裂について時系列に沿い詳細な検討行っているものとして、Dmitry Shlapentokh, "Eurasianism: Past and Present," *Communist and Post-Communist Studies* 30, no. 2 (1997), pp. 129–151がある。また、Sergei Glebov, "A Life with Imperial Dreams:

人種問題の論文等をユーラシア主義の機関紙に投稿しており、むしろ彼が本職の学問に精力的に取り組んだ1930年代にこそ、これまでとは異なるユーラシア主義の特徴を見出せよう。トルベツコイは、1920年代からユーラシア主義と同時並行で言語学や民族学の研究を進めていたが、両者の関係を検討することもユーラシア主義研究にとって重要である。

本稿ではトルベツコイの著作および史料を一つ一つ取り上げ、リャザノフスキーやそれに続く先行研究が比較的注目してこなかった、ユーラシア主義者の立場、すなわちロシア人亡命者であると同時に学者という立場を、トルベツコイを例に検討する。ユーラシア主義は亡命という閉鎖的環境ならではの少数精鋭の複数分野の専門家集団であった。この学際性はナチスやソ連を相手にする時にこそ威力を発揮した。そこから導き出されるのは、彼にとって主要な関心であったと考えられる、ナチスに典型的な人種主義やソ連のイデオロギーやソ連という国家そのものに替わるオルタナティブ／代案としての「ユーラシア」という理念であり、トルベツコイの学問と密接に関わった1930年代ユーラシア主義を検討対象に含めることで、これまで明らかにされてこなかったユーラシア主義の一側面に光を当てることが出来るだろう。

1. 1927年「全ユーラシアナショナリズム」

ユーラシア主義者の「ユーラシア」に中国やインドが含まれず、その範囲がソ連邦の領域に限定されていた理由の一つは、この思想がボリシェヴィズムの克服を通して形成され、ソ連のイデオロギーに取ってかわる新しい理念として提示されたからである。1920年代のトルベツコイのソ連観については、浜が詳細で参考になる分析をしている[(10)]。浜は「トルベツコイのソ連観は『親ソ』『反ソ』というような二項対立的な分類では説明のできない複雑さをもっている」としている[(11)]。1920年代のソ連観の概要について整理しておきたい。1920年代において、トルベツコイがソ連に肯定的な評価を与えている点は、反植民地主義と連邦制である[(12)]。またロシア革命とそれがもたらした結果、およびボリシェヴィキへの批判は1920年代を通して一貫している。特にトルベツコイが批判したのは統治理念としてのコミュニズム、社会主義であった[(13)]。

本稿ではこれまでの先行研究が指摘してこなかった問題として、トルベツコイの1927年の論文「全ユーラシアナショナリズム」に、ソ連の民族政策におけるコレニザーツィヤ（現地化）原理についての議論が含まれていたことを補足しておきたい。「コレニザーツィヤ（現

Petr Nikolaevich Savitsky, Eurasianism, and the Invention of ‘Structuralist’ Geography,” *Ab Imperio* 3 (2005), pp. 299–329; idem, “Science, Culture, and Empire: Eurasianism as a Modernist Movement,” *Slavic and East European Information Resources* (2003), pp. 13–31 はユーラシア主義の学問的側面を扱っている点で本稿とアプローチは似ているが、検討対象がサヴィツキーであり、時代は1920年代を中心としている。

10 浜『ユーラシア主義とは何か』111–137頁;浜「N. S. トゥルベツコイのユーラシア主義」87–94頁。

11 浜『ユーラシア主義とは何か』111頁；浜「N. S. トゥルベツコイのユーラシア主義」90頁。

12 浜「N. S. トゥルベツコイのユーラシア主義」87–90頁。

13 同上、90–91頁。

地化）」とは現地の民族言語の尊重、その言語による幹部養成、現地幹部の優先的登用のことである[14]。この問題こそ、トルベツコイのユーラシア主義の1930年代への展開と深く関係している。トルベツコイの現地化政策に対する考えをまとめるならば、この政策によって各民族の独自性は尊重されるが、その分だけ差異が生まれるのであり、これを強調しすぎると各民族の溝はさらに深まってしまうということである。この点はトルベツコイとソ連政府の民族に関する考え方の不一致であり、彼が補完しなければならない点であった。つまり、ユーラシア主義という思想を説得力のあるものにするためには、共通性という考え方を掘り下げ、理論化しなければならなかった。しかし、それはロシア化でも、諸民族の権利の剥奪でも、マルクス主義でもない、別方法でなければならなかった。これについてトルベツコイは学問的知識を用いながら、探求を続けていくことになる。

「全ユーラシアナショナリズム」で表明されたトルベツコイのユーラシア主義は、ソ連を前提とした主張であった。

> 「かつてはロシア帝国と呼ばれ、現在はソヴィエト社会主義共和国という名称のこの国家の本質は、この国家に住んでいる諸民族の総体でしかあり得ない。それは独特な多民族国家とされ、また独自のナショナリズムを持っている。この民族を我々はユーラシア民族と、その領域をユーラシアと、そのナショナリズムをユーラシアニズムと呼ぶ」[15]。

しかし、トルベツコイは単にユーラシア主義をそのまま当てはめることの限界や、ソ連と自らの主張の違いを認識しており、ボリシェヴィキの政策を、それまで蔑視されてきた少数民族の民族性を尊重したものとして、部分的に評価したうえで、この政策の欠点を補うものとして、ユーラシア主義を提示していた。この論文からはトルベツコイがソ連の連邦制を肯定的に捉えていることが伺えるが、トルベツコイはソ連の中の各民族共和国におけるコレニザーツィヤ政策など、よりミクロな問題にも目を配ることで連邦制に潜む問題もまた認識していたことを指摘しておきたい。

トルベツコイのコレニザーツィヤ論を具体的に見ていきたい。1927年のトルベツコイのこの論文はボリシェヴィキによる民族境界の画定やコレニザーツィヤへの反応として表れている。トルベツコイはボリシェヴィキの民族政策であるコレニザーツィヤを認識していた。

> 「それぞれの民族が住む領域では彼らの言語は公式のものとされ、彼らの自尊心はある程度満たされた。行政、その他の官職は彼らの周囲の人々によって占められ、しばしばその地域はそこに住む民族にちなんで公式に名づけられている」[16]。

これは確かに、民族共和国の機関に現地の言語や習慣を知っている現地出身者を登用するコレニザーツィヤ政策のことを言っている。さらにトルベツコイは、ボリシェヴィキのコレニ

14　塩川伸明『民族と言語（多民族国家の興亡 I）』岩波書店、2004年、45頁。

15　*Трубецкой Н.С.* Общеевразийский национализм // Россия между Европой и Азией. М., 1993. С. 94.

16　*Трубецкой.* Общеевразийский национализм. С. 93.

ザーツィヤは個々の民族をある程度尊重したが、民族間の違いだけを深める結果になるとした。

「ソ連邦の民族それぞれのナショナリズムはその民族が新たな状況に慣れるに従い、発達する。それぞれの民族言語での教育や文学の発達や地元の人間を最優先に行政やその他の職に任命することはそれぞれの地域間での民族的な違いを強め、地元の知識人の間に『よそ者』への嫉妬深い恐怖と自らの立場をより安定したものにしようとする願望を生む」[17]。

トルベツコイは、ボリシェヴィキの政策はそれぞれの「民族」の独自性を強めるばかりでそれを包括する枠組みがないことを指摘し、共通性の認識の必要性を唱えている。

「『民族』の中には『統一性を強めようとする中央集権的な大きな民族集団』と『大きな民族集団に対する独自性を強めようとする分離主義的な小さな民族集団』が存在する。後者は単なる分離主義にならないためにも属している『民族』とも共通性を持たなければならない」[18]。

そして、トルベツコイは、自らの理念をソ連に適用しようとしている。

「ユーラシア国家のそれぞれの市民が何らかの民族に属していることだけではなく、まさにその民族がユーラシア民族に属していることも理解しなければならない。全ユーラシアナショナリズムはユーラシア諸民族のそれぞれのナショナリズムを拡大したものとして、それぞれのナショナリズムの総体として現れるべきだ」[19]。

トルベツコイはボリシェヴィキの恣意的な民族の境界画定についても言及している。1920年代中葉、ボリシェヴィキはカザフ人、ウズベク人、タジク人、キルギス人、トルクメン人といった民族区分を画定し、それぞれに自治領域単位を付与してそのもとで民族意識を育成しようとした。欧米ではしばしばこの民族区分はムスリムの団結を破壊するための分断政策とされた[20]。亡命者であったトルベツコイも西欧的な見方の影響を受けていたものと考えられる。

「それぞれの民族は必ずある共通の特徴で結びついている何らかの民族集団に属している。また、同一の民族がある特徴によって別の民族集団に属し、他の特徴によって別の民族集団に属すというのはしばしばあることだ」[21]。

---

17 Там же.
18 Там же. С. 96.
19 Там же.
20 Francine Hirsch, “State and Evolution: Ethnographic Knowledge, Economic Expediency, and the Making of the USSR, 1917–1924,” in Jane Burbank, Mark von Hagen, and Anatolyi Remnev, eds., *Russian Empire: Space, People, Power, 1700–1930* (Bloomington: Indiana University Press, 2007), pp. 156–161; 塩川『民族と言語』49 頁。
21 *Трубецкой.* Общеевразийский национализм. С. 96.

トルベツコイは現在ボリシェヴィキが支配しているユーラシアの領域で自らの理想を描こうとしていたものと考えられる。トルベツコイの主張は、ボリシェヴィキの政策を、個々の民族文化を尊重した点である程度認めたが、民族間の違いを強めるだけでなく、ユーラシアに居住する民族が互いに持っている共通性も強調されなければならないというものである。トルベツコイは分離主義の問題などソ連の連邦制の限界を指摘している。国民国家を超える枠組みはあったとしても、その内部の多種多様な民族をどうまとめるのか、つまり多様だが共生するだけの必然性もあるということをユーラシア主義者は主張しなければならなかった。こういった姿勢を理想論、または領域内に住む人々の分離志向の無視として批判することもできるが、栗生沢によれば、トルベツコイは『ロシアの自己認識の問題に寄せて』（1927年）の「序文」で、ロシアが他の民族と同価値でしかないことを示すべく奮闘し、ユーラシアとしてのロシアが帝国主義的ロシアと同じ道を歩むことがないよう願っていた[22]。この共通性の探求こそが彼の課題であり、独自性でもあったのである。

2.「理念統治」――「国家の体制と統治形態」（1927）

トルベツコイの目指す理念は、ソ連のものでも、西欧の民主主義や議会制でも、そしてファシズムでもなかった。それは特定の理念を掲げ、その理念を代弁する統治層によって行われる政治である「理念統治」（Идеократия）という考え方に表れている[23]。

理念統治という概念は「国家の体制と統治形態」（1927）で登場した。ここには1930年代の主張の前兆があった。同論文では、「議会政治、民主主義の危機」「民主主義は死に向かっている」といった民主主義批判に加え、ソ連、イタリアのファシズムへの批判が述べられている。トルベツコイによれば、ソ連の共産主義や、イタリアのファシズムは強固な世界観の共通性を欠いているために不完全な理念統治だとする。

> 「ムッソリーニの個人崇拝と組織そのものによって理念統治の本質が隠されている。よってファシズムは調和の取れた世界観を持つシステムを創造しない。…結局のところファシズムの根本理念は内容の乏しいものとなり、ほとんどがイタリア民族の神格化や生物学的特徴としてのこの民族の自己確立に集約されてしまう」[24]。

ソ連でも世界観の共通性ではなく、プロレタリアートの闘争の感情という共通性があるに過ぎないとする。しかし、トルベツコイは、共産主義という理念にこそ批判的だが、ソ連は理念統治のための基盤をつくっているとしている。

> 「ファシズムもコミュニズムも偽理念統治だ。真の理念統治はまだ現れていないが、すぐに現れる

22　栗生沢「ユーラシア主義者のロシア民族・文化論」154頁。
23　浜『ユーラシア主義とは何か』116頁；浜「N. S. トゥルベツコイのユーラシア主義」91–92頁。
24　*Трубецкой Н.С.* О государственном строе и форме правления // Наследие Чингисхана. М., 1999. С. 488.

だろう。現時点では、偽理念統治の国家の社会はこの真の理念統治のために政治的、経済的、日常生活の形式と前提を与えている」[25]。

トルベツコイは論文の最後で次のように締め括っている。

「我々ロシア人には今日の共産主義の偽理念統治を真の理念統治に取り替えるという大きな課題がある。…ユーラシア主義もこの仕事に対して使命を負っている」[26]。

既存の西欧の民主主義やファシズム、そしてコミュニズムでもない新しい理念こそユーラシア主義だったのである。

こうしたソ連でも西欧のファシズムでもない理念の追求は 1930 年代においても継続された。論文「理念統治国家を支配する理念について」（1935 年）には、西欧にもソ連にも賛同できない亡命者としての立場がよく表れている。まず、次のような西欧の民主主義への批判が見られる。

「統治者が様々な政党から選ばれるために、一貫して文化や経済を導くことができない」[27]。

この点ではトルベツコイは同時代の一党政治体制（ソ連のスターリニズム、イタリアのファシズム、ドイツのナチズム）の利点を認めている。

ではソ連、ナチス・ドイツへの批判はどのようなものだろうか。ソ連やナチス・ドイツは形式のみに過ぎず、トルベツコイの理想とする理念統治の理念を満たしていなかった。ソ連は一つの階級、ドイツは一つの民族に基づくイデオロギーであって、その国に住む他の階級や民族が犠牲となると主張した[28]。具体的にはプロレタリアートの独裁やゲルマン民族中心主義（アーリア主義、反ユダヤ主義）を指していたと考えられる。トルベツコイは理念統治国家においては「全体」の福祉が重要だとする。

「ある階級やある民族の他の階級、民族に対する優越が正当化されてはならない。全体とは人種ではなく共通の歴史的運命や、一つの文化、国家を創造する作業によって結びつく諸民族の全体性である。これは人類学的、生物学的なものではない」[29]。

そして人類学的、生物学的タイプを恐らくはナチス・ドイツを意識して「動物的ナショナリズム」と批判した。

---

25 Там же.
26 Там же. С. 492.
27 *Трубецкой Н.С.* Об идее-правительнице идеократического государства // Николай Трубецкой: Наследие Чингисхана. М., 2007. С. 615.
28 Там же. С. 616–617.
29 Там же. С. 617–618.

3. トルベツコイのソ連改革計画

トルベツコイとの対談に基づいた、1934 年 8 月 11 から 12 日の言語学者 N. ドゥルノヴォ（N. Durnovo, 1876–1937）の証言からは、トルベツコイが上述の理念統治を実際にソ連で適用しようとしていた様子が窺える [30]。証言は 1934 年であるが、ドゥルノヴォはトルベツコイのユーラシア主義を 1924 年までに知っており、ヨーロッパで最後にトルベツコイと面会したのは 1927 年とある [31]。以下で示されるトルベツコイの考えはこの時期のものである。手紙などと同様、公表されていた出版物ではないため、トルベツコイの主張が単なるプロパガンダではないことが分かる。トルベツコイの計画について、ドゥルノヴォは以下のように言っている。

「彼は私との対談の際に、自分の政治的考えを展開したが、私は政治体制交替の理論と、民衆の代表による多議会制の組織化についての考えしか覚えていない。その理論によれば、終戦までに存在していた国家体制の全ての形態は貴族制と民主主義という二つの原則に基づいていた。第一のタイプはすでに時代遅れであり、第二は衰退の兆候を示している。新しい形態はイデオロギーに基づくもので、このような形態は現れてきている。例えば、ソ連、ファシストのイタリアのそれである。このような形態によって、トルベツコイは将来のユーラシア体制を建設したいのだ」[32]。

トルベツコイの構想はかなり実際的なものであった [33]。トルベツコイの教育制度についてドゥルノヴォはこう述べている。

「全ての青年男女は国立の学校で教育を受ける。そこには、その時の党のイデオロギーのみが浸透している。学問、文学、芸術は独裁政党に従属せねばならず、他のイデオロギーは許可されない。しかし、いかなるイデオロギーなのか、どのような党の政策なのかは私にはわからなかった。資本主義について、彼は否定的に語っていたが、共産主義が彼にとって資本主義と同じように否定

---

30 ドゥルノヴォはトルベツコイや R. ヤコブソン（R. Iakobson, 1896–1982）とモスクワ大学言語学部で同門の言語学者。革命直後はモスクワに留まったが、1924 年から 1928 年にかけてチェコスロヴァキアでプラハ言語学サークルに参加し、トルベツコイ、ヤコブソンと交流しながら研究を進める。1928 年にソ連に帰還し、その後、チェコでのロシア人亡命者との関係について尋問を受けた。

31 *Робинсон М.А., Петровский Д.П.* Н.Н. Дурново и Н.С. Трубецкой: проблема евразийства в контексте «дела славистов» (по материалам ОГПУ–НКВД) // Славяноведение. 1992. № 4. С. 79.

32 Там же. С. 80.

33 O. カズニーナ（1995）、D. シュラペントフ（1997）、C. アンドレーエフ（2004）らの研究では、こういった積極的な改革計画には主にサヴィツキーが熱心であったとされてきた。*Казнина О.А.* Н.С. Трубецкой и кризис евразийства // Славяноведение. 1995. № 4. С. 89–91; Catherine Andreyev and Ivan Savicky, *Russia Abroad: Prague and the Russian Diaspora, 1918–1938* (New Haven and London: Yale University Press, 2004), pp. 135–148; Shlapentokh, “Eurasianism: Past and Present,” p. 137.

的なものなのかは明らかではない」[34]。

また、議会制度についても具体的な構想を持っていたことが証言されている[35]。しかし、ユーラシア主義の政治運動としての意味が失われた1920年代後半には、スターリンのソ連への批判と共に、トルベツコイの思想にも大きな変化が見られる。

4. 1930年代トルベツコイの変化―政治から学問へ

まず、トルベツコイから「サヴィツキーへの手紙」（1930年12月8–10日）について見て行きたい。この手紙については、カズニーナの研究に依拠している。カズニーナはロシア連邦国立文書館に保存されているサヴィツキーの手稿のほぼ全文を紹介している。トルベツコイは、同僚のサヴィツキー宛の手紙の中で、ソ連におけるユーラシア文化の存在と、その統治者であるスターリンへの批判を表明している。

トルベツコイはソ連という国家そのものを否定したわけではなく、むしろそこに「ユーラシア」を体現する可能性を見出している。ソ連でヨーロッパとは異なる新しい文化の兆候ができつつあることを指摘した。その上でこう述べている。

「我々は新しいユーラシア文化の出現を予言した。今、この文化は事実上存在しているが、完全な悪夢であり、我々はそれを見て恐怖の中にいる」[36]。

トルベツコイが悪夢とする理由の一つにはスターリンの存在があった。当時、亡命者の間ではスターリンを社会主義国家の指導者というよりもロシア民族主義や強国ロシアの指導者として期待を寄せる傾向があった[37]。しかし、トルベツコイにはそのような考えはなかったようだ。

「スターリンはスターリンだ。彼がプロレタリアートの独裁の名の下に活動するか、正教の名の下に活動するのかはどちらでも構わない」[38]。

さらに、官僚主義体制と粛清を取り上げ、スターリンの下にあるソ連は、身体的、精神的破滅の時代にあるとし、その現状を批判した[39]。

---

34 *Робинсон, Петровский.* Н.Н. Дурново и Н.С. Трубецкой. С. 80.

35 Там же.

36 *Казнина.* Н.С. Трубецкой и кризис евразийства. С. 93.

37 Shlapentokh, “Eurasianism: Past and Present,” pp. 145–146. これに関して詳細に分析したのが中嶋毅「道標転換派とソヴィエト権力」『スラヴ研究』第41号、1994年、217–244頁。この研究を参考にユーラシア主義との比較を試みたのが、拙稿「ユーラシア主義者N. S. トルベツコイの思想に映るソ連1920–1927：道標転換派N. V. ウストリャーロフとの比較の試み」『政治学研究』（慶應義塾大学法学部）第39号、2008年、109–138頁。

38 *Казнина.* Н.С. Трубецкой и кризис евразийства. С. 93.

39 Там же. С. 93–94.

このスターリン体制への批判は、実は学問的な問題と結びついていた。この手紙の中で、トルベツコイはサヴィツキーの「ユーラシア主義の学問的課題」について感想を述べ、サヴィツキーに歩むべき道を指南している。

「あなたの論文＜ユーラシア主義の学問的課題＞は本質的にはとても面白い。しかし、外面的にはそこには二つのテーマの混同が生まれているようだ。ユーラシア主義の今後 10 年の学問的戦略についてなのか、ロシアの学問への期待なのか。…本質的な問題はあなたがロシアの学問のこととするか、ユーラシア主義の学問とするかによって全く変わってしまう。あなたの論文では、地理学と歴史学についてのみ語られている。良く分かっているように、ユーラシア主義の地理学はあなたに代表され、一方ユーラシア主義の歴史学はヴェルナツキーに代表される（他は計算外だ！）」[40]。

トルベツコイは学問という点では抑圧的体制下のソ連に期待を抱くのは間違いであり、それはその体制から自由であるヨーロッパにいる亡命者、ユーラシア主義者の役割として線引きする必要があると諭した[41]。トルベツコイがこの議論のための面会をサヴィツキーに提案していることから、彼は「ユーラシア主義の学問」という側面に関心を抱いたと考えられる[42]。ユーラシア主義の政治化、とりわけソ連とマルクス主義への支持に回ったパリ・ユーラシア主義への不信から 1929 年頃よりユーラシア主義から距離を置いていたとされるトルベツコイは、翌 1930 年を契機に、サヴィツキーらのユーラシア主義に再び関わろうとした[43]。学問としてのユーラシア主義はむしろトルベツコイにとって活力となった。

1920 年代を通して、専門の言語学研究とユーラシア主義の活動を並行して行っていたトルベツコイはユーラシア主義を失った後、「学問の空虚状態」に陥った。ヤコブソンに言語学の研究が身に入らないことを明かしている[44]。しかしその後、上述のサヴィツキーとのやり取りを経て、トルベツコイは実際にサヴィツキー、ヤコブソンと協同して「ユーラシア」という概念をめぐって活動するとともに、ユーラシア主義の機関紙に再び投稿し始めた。1930 年代のトルベツコイの音韻論研究とこういった活動の関係性はより検討していく必要があるが、ヤコブソンがサヴィツキーからも学問的刺激を受けていたことは興味深い。つまり、先のサヴィツキーの「ユーラシア主義の学問的課題」の歴史学と地理学に、言語学が加わったのである。

スターリン体制批判とソ連内での文化の衰退に関するトルベツコイの考えは論文「創造性の衰退」（1937 年）の中で披露され、トルベツコイはソ連の文化生活における創造性の衰退

40　Там же. С. 94.

41　Там же.

42　Там же. С. 95.

43　トルベツコイは 1928 年にパリ・ユーラシア主義者スヴチンキーへの手紙の中で「＜ユーラシア主義＞という言葉はもはや一般的には＜ネオ・マルクス主義＞の一種となってしまった」と失望を示した。*Трубецкой Н.С.* Письма к П.П.Сувчинскому 1921–1928 // Москва: Библиотека-фонд «Русское Зарубежье»: Русский путь. 2008. С. 300.

44　*N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, prepared for publ. by Roman Jakobson (Berlin: Mouton, 1985), p. 157.

を不安視した。「理念統治」というトルベツコイの考えについては述べたが、彼にとって、文化や理念は国家をつくるうえで重要な要素であった。理念統治という観点からファシズムやナチズムに比してソ連を相対的に評価するようになったという見方も可能だが、この論文を見るとソ連の「理念統治」に関して決して肯定的とは言えない。トルベツコイは、ソ連の文化生活やソ連の理念である共産主義の衰退を批判した。トルベツコイによれば、創造性の衰退は「創造性の自由を制限する政府の政策」によって引き起こされている[45]。さらに、トルベツコイはこう続ける。

「ソヴィエト国家というよりもむしろソヴィエト型の共産主義が衰退していることを我々は見ることができる。…マルクス主義は他の理念に取り替えられなければならない」[46]。

同時に、トルベツコイの意見によれば、ソ連では国民の力が工業に集中させられ、文化を育むための創造力が衰退していた[47]。また、マルクス主義というイデオロギーそのものが文化、学問を制限し、衰退させていることが指摘された[48]。

「創造性」というテーマはトルベツコイの人生と深く関わっていた。ヤコブソンはトルベツコイとの書簡集の序文でこの論文を紹介しながら、こう締め括っている。

「トルベツコイにとって人生と創造性は最後まで切り離すことの出来ないもののままであった。それはイデオロギー的、権威主義的、経済的な包囲からの恐ろしい圧力に対する絶え間ない闘いとして運命付けられていたものであった」[49]。

つまり、彼はソ連やナチスといったイデオロギー的脅威と闘いながら、学問や文化の創造性という問題を追及していったのである。

こういった 1930 年以降におけるトルベツコイの政治から学問へという意識の変化や、「創造性が衰退した」ソ連の外にいる亡命者ならではの学問という役割をユーラシア主義に積極的に意味づけていく志向性は、1932 年『ユーラシア主義綱領』（プラハ）で見られるように、他のユーラシア主義者の間でも共有されていたとも考えることが出来る。このプログラムはサヴィツキーや N. アレクセーエフ（N. Alekseev, 1879–1964）と言ったプラハのユーラシア主義者が作成したものである。

「現代の社会学及び歴史哲学の議論に賛同し、ユーラシア主義者は、文化的総体がこの総体に入る個々人の単なる総和ではなく、自分自身の生活によってそれぞれの歴史的運命を持つ、ある究極

45 *Трубецкой Н.С.* Упадок творчества // Николай Трубецкой: Наследие Чингисхана. С. 626.
46 Там же. С. 627–628.
47 Там же. С. 626–627.
48 Там же. С. 628–629.
49 *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, p. xiv.

的な集合的統一であることを認める」[50]。

コレニザーツヤ政策をはじめとするソ連の民族政策への批判、理念統治論でも見られたソ連やファシズム、ナチズムへの批判からは、トルベツコイがこれら既存のものとは異なる民族観、すなわちユーラシア主義という世界観を打ち出そうとしていたことを読み取ることが出来る。ユーラシアの多民族性を強調し、それら諸民族を包括する思想を目指したユーラシア主義者にとって、人種や民族の問題は当然重要であり、多種多様な民族が共生可能である理由をいかに主張するかが問題となった。

トルベツコイの 1920 年代の思想には、二つの側面があった。ソ連の統治者とその理念を批判する一方で、ソ連という国家自体に「ユーラシア」を体現する可能性を見ようとしていた。それに加えて 1930 年代には特にナチス・ドイツへの批判が見られるようになった。ユーラシア主義の学問という側面に関わっていく中で、ナチスのイデオロギーに直面したのである。1938 年 3 月ドイツ軍がオーストリアを占領した。トルベツコイはその際にゲシュタポから尋問を受けて体調を崩し、6 月に 48 歳でこの世を去った[51]。この尋問と彼の死は、次の章で扱う論文「人種主義について」(1935) および「インドヨーロッパ問題について」(1937) と無関係ではないだろう。ゲシュタポによってトルベツコイの様々な資料が没収され、その後消失したことは示唆的である[52]。

5. ナチス型人種論に対する批判―「人種主義について」(1935 年)

トルベツコイの「人種主義について」は、ナチスの人種論や高まる反セム主義への反応であった。ベルリンでロシア政治文化サークルを運営していた A. ザコメルスキー（A. V. Meller-Zakomelsky）は 1934 年 7 月に、ナチスから影響を受けた「ユダヤ人はユーラシアにとって異質な人種である」という人種論の議題をユーラシア主義の委員会に送った[53]。それに対しサヴィツキーは「ある特定の精神は特定の人種に固有という考えがあるが、高い民族も、低い民族も存在しない。ユーラシア主義とは様々な人種の協力であり、彼らの精神、文化創造における団結である」と反論し、トルベツコイにユーラシア主義の雑誌『ユーラシア・ノート』（Евразийская тетрадь）に掲載する人種に関する論文を書くべきだと提案した[54]。トルベツコイは冒頭で「この問題をユーラシア主義に引きつけることも可能だ。よって、この問題をユーラシア主義の出版物のページで議論することは不適切ではないだろう」[55] と

50 Евразийство. Декларация, Формулировка, Тезис, Прага. 1932 г. // ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации), ф. 5783, оп. 2, д. 23, л. 5.

51 N. S. Trubetzkoy, *The Legacy of Genghis Khan and Other Essays of Russia's Identity*, ed. by Anatoly Liberman (Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 1991), p. 335.

52 *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, p. vi.

53 N. S. Trubetzkoy, "O Rasizme," in *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, p. 468; Andreyev and Savicky, *Russia Abroad*, pp. 147–148.

54 Andreyev and Savicky, *Russia Abroad*, pp. 147–148.

55 *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, p. 468.

述べているように、この提案を受け入れ「人種主義について」を執筆したのである。トルベツコイが生活していたオーストリアはナチス・ドイツの影響を強く受けていた。ウィーン大学に勤めていたトルベツコイは、ナチス党員の歴史家 J. プフィッツネル（J. Pfitzner, 1901–1945）がポストを得ようとしていることに反対し、1934 年 6 月 –7 月にヤコブソンに次のような手紙を送った。

「ハーシュ教授が、積極的にプフィッツネルにポストを与えようとしている。私は悪い噂を聞いているこの人物がここに来るのをなんとか防ぎたいと考えている。学問的に、もしくは人物として彼を支持する資料を許してはいけない」、「あなたは私が依頼したプフィッツネルについて暴露する資料を集めてくれましたか。この問題が私にとってとても重大であることを、どうか忘れないでください」[56]。

おそらく、ヤコブソンは自分がユダヤ人であることから、この問題に関してトルベツコイに加担することが自分自身にとっても危険であったのだろう。結局、トルベツコイはウクライナ出身の哲学者 D. チジェフスキー（D. Cyzevskyj, 1894–1977）に「急用の依頼」として、同年 10 月に同様の手紙を送っている[57]。

論文「人種主義について」でのトルベツコイのナチス型人種論への批判には、人種階級論と遺伝決定論という 2 つの論点がある。まず、人種階級論への批判である。

「ユダヤ人はロシア・ユーラシアにおいてなんらかの役割を果たしてはならず、（ユーラシアの）現地人がユダヤ人やユーラシア人種とは異質な人々、例えば黒人やインド人と結婚することを禁じようとする意見がある。（というのは、メンデルの法則によれば、交配において、人種的特徴は分裂するものの、それ自体存在することを止めないからである。）この議論は全て学問的に見え、その著者たちは「確立した学問」を根拠にしていることだと主張している。現代人類学の信憑性は脇においておき、現代学問のほとんどが危機に瀕している（とりわけ、フォン・アイクシュテッドの人種の階級化（分類）は少しも定説とは看做されないだろう）」[58]。

1934 年『人種学と人類史』で「アーリア人種」の優秀さを論じたドイツの人類学者 E. アイクシュテッド（E. Eickstedt, 1892–1965）を批判すると同時に、ここには人種主義が各学問と結びつけられて論じられることへの危惧も含まれていた。

また、トルベツコイは人種を人間の価値を測る指標とはしなかった。トルベツコイの中では人類学的「人種（раса）」と文化的「民族（нация）」は区別されていた。ユーラシア主義者の主張する「ユーラシア民族」の中には様々な人種が含まれていた。

---

56 Ibid., pp. 306, 308.

57 Jindrich Toman, *Letters and Other Materials from the Moscow and Prague Linguistic Circles 1912–1945* (New York: Michigan Slavic Publications, 1994), pp. 152–153.

58 Trubetzkoy, “O Rasizme,” p. 468.

「ユダヤ人に関わらないプログラムの『人種主義者』の論点に限れば、このことについて語るのはロシア人にとっては実に滑稽だ。黒人がロシア人と混交することはかなり稀であるが、この珍しいケースが起こる場合に、ロシア人によってこれが非難されるということはない。というのは、我々の偉大な詩人 A. C. プーシキンの血管には黒人の血が流れているからだ。ロシア人貴族とジプシーの結婚はある時期珍しくなかったが、私の知る限り、その子孫の特別な才能が際立ったということはないものの、ジプシーの血が混ざっていない平均的ロシア人よりも劣っているということは決してない。ロシア人とカフカースの高地人、グルジア人、アルメニア人との結婚に関すれば、これらはいつもとても良い結果を提供する。これを禁止することは、カフカースと残りのロシア・ユーラシアの間に中国の万里の長城のようなものを造り、植民地に対するような、カフカースとの関係を人工的に強めることになる」(59)。

混血を「生物学的退化」とするような当時のドイツを中心とするヨーロッパの風潮の中では、実際的な方策として移民制限、さらには現地のヨーロッパ人と「劣等」とされる人種との間の結婚が禁止されることがあった(60)。トルベツコイ自身も亡命者という立場上こうした動向と無縁ではなかったと考えられる。そうした状況の中で、トルベツコイは異人種間の結婚をむしろ肯定的なものとして捉えようとした。

トルベツコイの「人種主義について」に見られるナチス型人種論への批判のもう一つの論点は、遺伝決定論への批判であった。トルベツコイが、言語や民族文化の性質を規定するのは、遺伝的なものではなく、環境であり、ナチス的な人種論とは対をなすものであった。トルベツコイはまず反ユダヤ主義の問題について扱っている。ドイツの優生学者シュタインメッツが「戦争がなければ、全ての人が今日のユダヤ人のように悪賢く、冷酷で、卑劣になるだろう」(61) としたように、優生学者の中には精神的特質も遺伝するという見方、すなわち特定の性格が特定の人種に結びつくとする遺伝決定論を主張したものもいた。ドイツのロシア人亡命者の反ユダヤ主義の議論では、ユダヤ人の精神的特性はソ連の民族に共通な心理学的特性とは異質なものであり、ユダヤ人や黒人、インド人といった他の人種との結婚は禁止すべきだという。これに対し、トルベツコイは、メンデルの法則によれば、異人種間での交配では、確かに人種的特徴は分裂し、存在し続けるが、心理的な特性については科学的に「つくられた」事実だと優生学を批判した。トルベツコイは心理特徴と人類学的特徴の相関関係は科学的に証明されなければならないとし、反ユダヤ主義者が批判するユダヤ人の性格や影響力は人種とは関係のない環境によるものであって、先天的なものではなく後天的なものだとした。

「やはり、この分野において問題は、『人種主義者』が思っている以上に簡単ではない。それぞれの人物の心理学的な特徴のある部分は受け継がれたものだが、他の部分は後から得たものだということは疑いない。いわゆる『才能』や『気質』といったものは、後から得たものというよりは、

59 Ibid., p. 474.

60 シーラ・ウェイス「ドイツにおける『民族衛生学』運動」マーク・アダムス編（佐藤雅彦訳）『比較優生学史』現代書館、1998 年、44、64 頁。

61 レオン・ポリアコフ『アーリア神話：ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』法政大学出版、1985 年、394 頁。

遺伝的特徴であることは確立されたと看做してよい。しかし、まさに『才能』や『気質』の方向性が遺伝によって伝えられるということは、全く証明されていない。反対に、現代の個人心理学や偉人の伝記研究は、才能の方向性は経歴によるということを結論付けている。よって、心理的特徴と遺伝の関連は、一見するところよりもかなり複雑である。民族の性質といった複雑な問題を検討する時は、ある民族の全ての特徴に対する人種的決定論という根拠のない推論から結論を出してはならない。ある個人の特徴を遺伝だけで説明してはならないのと同じように」[62]。

では、こういったナチス型人種論批判とユーラシア主義はどのような関係にあったのか。これはまさに民族の捉えかたにも関わっていた。トルベツコイは民族を生物学的遺伝だけで論じることに異議を唱えた。

「ドイツの人種主義は人類学的物質主義唯物論に基づいている。つまり、人間の意志は自由ではなく、結局全ての人間の行為は遺伝によって引き継がれた身体的特徴に規定される。そして、計画的交配という手段によって、とりわけある人類学的統一体、すなわちある民族の勝利に貢献するように人間のタイプを完全にすることが出来るという考えに基づいている。経済的な唯物論を拒否するユーラシア主義は、経済的な唯物論よりもっと哲学的な根拠が脆弱な、人類学的な唯物論を受け入れることに何の根拠を見出さない」[63]。

つまりトルベツコイは人間の身体的特徴が文化や精神を規定するとは考えなかった。「ユーラシア主義は経済的唯物論、人類学的唯物論を拒否する」と書いているように、トルベツコイはマルクス主義と共に社会ダーウィン主義に批判的であった[64]。

6. アーリアン学説への批判―「インドヨーロッパ問題について」（1937）

この論文は 1939 年のユーラシア主義の雑誌、『ユーラシア・クロニクル』（Евразийская Хроника）第 13 号に掲載される予定だったが、ナチスの圧力によって発表することができず、後になって発表された[65]。彼がゲシュタポに尋問を受け、手稿や論文が没収されたことを考えると、学問的な意味でも、トルベツコイがナチスと対立しており脅威にさらされていた

62 Trubetzkoy, “O Rasizme,” pp. 468–469.

63 Ibid., p. 474.

64 以下の研究では 19 世紀ロシアの非ダーウィニズムとの関連が指摘されている。Glebov, “A Life with Imperial Dreams,” pp. 312–314; Jindrich Toman, “The Ecological Connection: A Note on Geography and the Prague School,” *Lingua e Stile* 16 (1981), pp. 171–282. グレボフの論文はサヴィツキーの地理学と土壌学者ドクチャーエフとの関係、トマンの論文は 19 世紀ロシアの生物学者によるダーウィニズムではないラマルク主義的進化論がプラハ言語学サークルに与えた影響について論じている。しかし、より広範な「社会ダーウィン主義」やトルベツコイとナチスの関係については扱われておらず、トマンもユーラシア主義との関係は今後の課題とするとしており、限定的である。

65 *N. S. Trubetzkoy’s Letters and Notes*, pp. xiv, 74.

ことがわかる[66]。トルベツコイが書いたのはその死の前年の 1937 年である。

「インドヨーロッパ問題について」では、アーリアン学説への批判が表明され、上述のようにナチスに出版が差し止められた。アーリアン学説とは、インドヨーロッパ語の話者は共通の文化を持ち、インドヨーロッパ祖人種の子孫であるという考え方で、ナチスの人種イデオロギーに用いられた[67]。

まずトルベツコイは、言語学の概念を人種論に結びつけることを批判した。

> 「インドヨーロピアンとは、使用言語がインドヨーロッパ語族に属する人々のことだ。この定義から科学的に可能な唯一のことは、インドヨーロピアンとは純粋に言語学的な概念であるということである。インドヨーロッパ諸言語が存在し、それらを話す人々がいる。唯一これらの人々が共有することは、彼らの言語がインドヨーロッパ語族に属するということだけである」[68]

というように、この論文の中で「インドヨーロッパ」とは、本来人種論とは別の問題であることが指摘された。当時、主にナチスに傾倒した言語学者らによって、インドヨーロッパ諸言語は構造上完全であるという主張やインドヨーロッパ諸言語の単一祖語が存在するという主張がなされ、インドヨーロッパ人種の神聖化に使われた[69]。トルベツコイはそういった主張に反対した。

> 「単一祖語という推測が今になってもなお主張され続けているのは、議論が間違った方向になっているからである。すなわちその主たるものは、言語学的な性質が忘れられていることである。前史の考古学、人類学、民族学がなんの正当性もなしに持ち込まれている。これらの試みは、決して存在していなかったであろう仮想インドヨーロッパ祖人種の故郷、人種、文化を描くためになされている。インドヨーロッパ問題は現代のドイツ的（ドイツ人だけではない）学者によって構成されている。次のように。『どのタイプの前史時代の陶器がインドヨーロッパ人のもののはずであろうか』しかし、学問はこのような質問に答えることが出来ない。かれらのロジックは循環論法的である。なぜなら、ある文化的人種的特徴を持ったインドヨーロッパ人原人種という仮定は根拠がないからである」[70]。

---

66 Trubetzkoy, *The Legacy of Genghis Khan*, p. 335.

67 Joan Leopold, “The Aryan Theory of Race,” *The Indian Economic and Social History Review* 7 (1970), p. 271.

68 *Трубецкой Н.С.* Мысли об индоевропейской проблеме // Николай Трубецкой: Наследие Чингисхана. С. 655.

69 C. ハットンの研究では例えば、Karl Vossler などが挙げられている。Christopher Hutton, *Linguistics and the Third Reich: Mother-tongue Fascism, Race and the Science of Language* (London: Routledge, 1999), pp. 66–69. トルベツコイも彼について批判している。*N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, pp. 130, 332–333.「インドヨーロッパ祖人種」の正当化にはトルベツコイが批判しているような言語学と人類学の混同も見られた。James Mallory and Douglas Adams, *The Oxford Introduction to Proto-Indo-European and the Proto-Indo-European World* (New York: Oxford University Press, 2006), pp. 441–451.

70 *Трубецкой.* Мысли об индоевропейской проблеме. С. 662.

これは「人種主義について」（1935）で展開された、特定の人種に特定の文化、精神が対応するというナチス型人種決定論への批判とも関連する。

トルベツコイが批判した「ドイツ的学者」らに影響を与えた議論は、19 世紀にあった。ドイツの言語学者 A. シュライヒャー（A. Schleicher, 1821–1868）はダーウィン学説を積極的に言語学に応用した。インドゲルマン原始語からあらゆる言語が系統発生的に発展したという彼の理論は「インドゲルマン原始語はいくつかの方言の一つに過ぎない」というトルベツコイの考え方と食い違う。系統発生とは異なる言語の発展の形態が存在することや、生物学の理論をそのまま言語学に適用できないことを、トルベツコイは自身の研究から確信していたのだろう。トルベツコイはこういった議論を「収斂」という考え方によって批判した。この考え方によれば、インドヨーロッパ諸言語の単一祖語というものは存在しなかった可能性すらあるという。すなわち、現在「インドヨーロッパ語」と言われる言語は元々別の言語であり「収斂」によって共通性を帯びたと主張した[71]。ここでも、「収斂進化的」言語観はダーウィン主義的で無秩序な「分岐」と異なる見方であった。

> 「単一のインドヨーロッパ祖語からそれぞれのインドヨーロッパ語派が派生したと言う推測には根拠がない。しかし、インドヨーロッパ語の語派の先祖の諸言語が、元々は似ていなかったものの、時間の経過により、継続的な言語接触、相互影響、借用によって、一体とはならないが、互いに似てくるというのは妥当性がある」[72]。

そして以下のように結論付けた。

> 「いずれにせよ、インドヨーロッパ語族というのは、緊密に結びついた分派から成り立ってはいない。それぞれの分派は他の分派と合致しないような膨大な語彙や形態の要素を有している。…それゆえに、インドヨーロッパ語族はいくつかの、元々は先祖を異にする諸言語が収斂発達によって生じたものであるという仮定は、あたかも全てのインドヨーロッパ諸言語が一つのインドヨーロッパ祖語から分岐発展したというような仮定よりも根拠が薄いということは決してない」[73]。

トルベツコイは「インドヨーロッパ語は完全である」というような発展段階を前提とする言語観に反対した。前述のように、言語学史の流れの中ではシュライヒャーがダーウィン主義を言語学に持ち込み、文化におけるヒエラルキーを言語に適用したが、トルベツコイはシュライヒャーと対立的な立場にあった J. シュミット（J. Schmidt, 1843–1901）の影響を強く受けたとされる[74]。こうしたトルベツコイの考えは、同時代の F. ボアズ（F. Boas, 1858

---

71 Там же. С. 658.

72 Там же.

73 Там же. С. 661.

74 ミルカ・イヴィッチ『言語学の流れ』みすず書房、1974 年、28 頁 ; Jindrich Toman, *The Magic of a Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle* (Cambridge: The MIT Press, 1995), pp. 197, 212.

–1942）[75] が提唱した文化相対主義の中に位置づけることができる。実際、トルベツコイや彼の同僚は、ボアズの影響を強く受けた人類学者・言語学者 E. サピア（E. Sapir, 1884–1939）と文通を行い、互いの研究、活動に賛同を示しており、両者の関係は親密なものだったと言える [76]。サピアやトルベツコイがヨーロッパ中心的な物の見方、特にヨーロッパの文化、言語の基準による民族文化の単線的発展ラインを批判したのには理由がある。サピアはネイティブ・アメリカンの言語・文化、トルベツコイはフィン・ウゴル語やコーカサスの言語・文化を研究していた。よって、インドヨーロッパの基準では説明できない文化の発展の例を知っていた。

7. ソ連との関係―「収斂進化論」による「ユーラシア」概念の構築

ユーラシア主義者の理論には民族の優劣、民族の融合、淘汰の概念はなかった。ユーラシア主義は多様な民族を包括する思想であったが、彼らの唱えるユーラシアの中における複数の民族の調和、協力という理念は、ソ連国家の多民族性を前提とした議論であると共に社会ダーウィン主義的な進化論へのアンチ・テーゼでもあったと思われる。トルベツコイをはじめとして、亡命者であったユーラシア主義者たちは、政治的のみならず、民族論の点でもナチス・ドイツとソ連の狭間にいた。

そして、この 1930 年代には、ユーラシア主義者によって、言語学、地理学の知識、方法論を用いてユーラシアの概念をつくる作業が行われた。この作業の基本となっていたのは、「単線的進歩」や「系統樹」的思考といった社会ダーウィン主義とは異なる、「進化論」であった。この作業が実際に行われたのは 1930 年代であったが、以下ではまず、その作業に着想を与えたと考えられるトルベツコイの議論、言語の収斂進化が含まれた論文「バベルの塔と言語の混合」（1923）[77] について検討したい。

社会ダーウィン主義的方法論に依拠した民族論への批判である文化的相対主義（cultural relativism）は、言語学者としてのトルベツコイの立場であり、トルベツコイの言語論とユーラシア主義とは深く関連していた。それは「収斂」という概念で説明できる。トルベツコイは遺伝的（発生的）に結びついた言語の単位である「語族」と非遺伝的（非発生的）な「言語連合」という二つの概念を用いて言語の発展・進化について論じた。以下のように、前者は諸言語間の垂直的関係、後者は水平的関係を示した。

> 「発生的なグルーピングとは別に、地理的に互いに隣接した諸言語がその発生とは無関係にグループを構成している場合がしばしば認められる。同一の地理的および文化＝歴史的地域の諸言語が

75 実際、ボアズについてはロマン・ヤコブソンとの文通の中で数回言及されている。*N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes*, pp. 132–136, 230–236, 362–363.

76 Toman, *Letters and Other Material*s, p. 140.

77 訳述、解説として、米重文樹「トゥルベツコイ＜バベルの塔と言語混合＞」『岡山大学言語学論叢』第 2 号、1992 年、15–35 頁があり、引用文訳出の際に参考にした。言語学の立場から言語連合を論じた研究として、朝妻恵理子「ヤコブソンの『言語連合』をめぐって：言語の『全体性』」『ロシア語ロシア文学研究』39 号、2007 年、18–24 頁。

特徴的な類似を示していて、しかもその類似が共通の起源によってではなく、長期間にわたる隣接関係と並行的発達によってのみ条件づけられているような場合がそうである。発生的原理に基づかないようなグループに対して我々は＜言語連合＞という名称を提案することにする」[78]。

トルベツコイはこの考え方を文化論にも適用した。

「文化の分布と相互関係は、一般的に、言語の相互関係と同じような原理に基づくのだが…互いに隣り合う民族の文化は常に一連の共通特徴を示す」[79]。

収斂によって遺伝的には別の系統でも共通性や類似性を持ち得るという主張は、ゲルマン主義やアーリア主義といった遺伝によって全てが決まる遺伝主義とは異なっており、前述の「インドヨーロッパ問題について」（1937 年）に見られるように、1930 年代にトルベツコイのナチス批判の根拠となった。

さらに、トルベツコイのこの言語観は彼個人に留まらず周辺の学者たち、少なくともヤコブソンやサヴィツキーにまで拡大しうるものであった。言語学者ヤコブソンと地理学者サヴィツキーは、トルベツコイが 1923 年の論文「バベルの塔と言語の混合」で提示した収斂進化論的言語観をもとに、「ユーラシア」という概念を学問的に根拠付けようとした。

ヤコブソンの 1931 年の論文「ユーラシア言語連合の特徴づけに寄せて」[80] はトルベツコイの「言語連合」に関する論考をより具体的に検討したものであった。トルベツコイはすでに前述の「言語の混合」においてこの概念を提示し、1928 年の第一回国際言語学会議で発表した。その直後からヤコブソンとトルベツコイらプラハ言語学派はこの概念をめぐって活発に議論を行い、精力的に研究するようになった[81]。米重はヤコブソン本人から、サヴィツキーやトルベツコイとはユーラシア主義をめぐって学問的協力関係で結ばれていたという証言を得ている[82]。

ヤコブソンは「種族の異なるユーラシア諸民族」において言語の構造的共通性が見受けられることを論じた。言語的に多様なのにもかかわらず、その中に統一性が存在するのは諸言語の収斂的発達と多様な相互影響の結果だと説明した。ヤコブソンの研究とユーラシア主義との関係は彼自身がこの論文の中で明らかにしている。彼はユーラシアを「特殊な土壌、植物、気候的特徴の総体」とし、いくつかの要素が共有される統一体だと説明した[83]。ここでヤコブソンは地理学者であるサヴィツキーの研究を紹介した。サヴィツキーは 1920 年代

78 *Трубецкой Н.С.* Вавилонская башня и смешение языков // Николай Трубецкой: Наследие Чингисхана. С. 458.

79 Там же. С. 459–460.

80 *Якобсон Р.* К характеристике евразийского языкового союза // Roman Jakobson Selected Writings I. Hague: Mouton, 1962. С. 144–201.

81 Jindrich Toman, *Letters and Other Materials*, p. 207.

82 米重文樹「ユーラシア言語連合の特徴づけに寄せて（訳者付記）」服部四郎編『構造的音韻論』岩波書店、1996 年、347 頁；*Йонэсигэ.* Евразийство на Дальнем Востоке. С. 13.

83 *Якобсон.* К характеристике евразийского языкового союза. С.146, 147–148.

を通してユーラシア主義活動の中でユーラシア世界の地理学的な統一性を指摘し、「ユーラシア」を説明してきた。ヤコブソンはこの論文の中で言語学的な資料と考察によってこの作業を行ったのだ。

サヴィツキーはトルベツコイ発案の概念「ユーラシア連合」に関して、ヤコブソンと手紙を交わした。サヴィツキーの手紙は、ヤコブソンの論文「ユーラシア言語連合の特徴づけに寄せて」の発表の前年に送られ、ヤコブソンの論文の原案に対してサヴィツキーが意見を述べるという形式となっていた。サヴィツキーはユーラシア諸言語間の収斂発達の過程を指す「ユーラシア化」という用語を造るべきだと提案した[(84)]。さらにサヴィツキーは「1930 年代の 10 年計画」というものを提示した。このプログラムに関して、言語学における 1930 年代の課題は、「ユーラシア化」概念の確立と実際に起こっているこの現象のリストの作成だとした[(85)]。サヴィツキーはユーラシア化の説明として地域発展（месторазвитие）という表現を用いた[(86)]。これは言語間の相互関係や環境との関係が言語の進化を規定するというもので、言語の特定の方向性は特定の場において発展すると主張した。

上述のサヴィツキーの「地域発展」という概念には、反ダーウィン主義的理論からの影響がある。サヴィツキーは生物学者 L. ベルグ（L. Berg, 1876–1950）のノモゲネシスという概念について言及した。 ベルグの主張は、異なる祖先を持つ生物同士であっても、環境が同じであれば、別種の生物でも共通性を持ち、類似してくるという収斂進化論であった[(87)]。収斂進化というこの進化モデルは、トルベツコイ、サヴィツキー、ヤコブソンによって言語学や地理学に適用された。トルベツコイはユーラシア主義の創始者の一人Ｐ . スフチンスキー（P. Suvchinskii, 1892–1985）にこう書いていた。

> 「サヴィツキーはどうやら生物学に従事せざるを得ないらしく、この学問についての本をいくつか読んでいる。彼にはいくらか面白い考えがあり、自分の成果を、『生物学とユーラシア主義』というテーマで必ずや論文を書きたいと熱心に思っている。私は、これはせいぜい素人のものとなってしまうと思い、彼に止めるよう説得した。テーマそれ自体は重要で面白い。しかしそれゆえに急ぐ必要はなく、本当は専門家がやるべきことなのだ。もしこのような専門家がまだ見つからないのなら、見つけるべきだ。時間はある。私自身も、自然科学の新たな確立を我々の課題の一つだと考えている。これはもっと大きな課題の重要な領域の一つである。すなわち、学問システムの創造である。サヴィツキーと話をして私は満足している。…彼は私にロシアで出版された二冊の興味深い本を教えてくれた。ベルグの『ノモゲネシス』（レニングラード、1922 年、国立図書出版所）とフボリソンの物理学に関する本である。…生物学の根本的諸問題にささげられたベル

84 Toman, *Letters and Other Materials*, p. 127.

85 Ibid.

86 Ibid., pp. 125–126.

87 生物学者（魚類学）であり地理学者であるレフ・ベルグ Lev Berg（1876–1950）は著作『ノモゲネス（*Номогенеза*）』において、進化における自然淘汰や生物の分類法として単一祖先を基準とする単系統群（Монофилия）を否定し、異なる複数の系統からなる多系統群（Полифилия）を支持した。そして、異なる祖先であっても、環境が同じであれば類似した特徴や共通性を持つようになるという収斂進化（Конвергентная эволюция）を主張した。

グの本は特に面白い。なぜなら、ベルグはダニレフスキーの後継者だと自覚していて、その立場において、我々に近い多くの考えを発展させているからだ（特に私の『ヨーロッパと人類』と『バベルの塔』）」[88]。

この手紙は 1926 年のものである。トルベツコイはこの時期に自身の言語論と同様の生物学の理論を知り、これが契機となって言語論を超える世界観としての「収斂進化論的言語観」が 1930 年代にかけて結実していくことになったと考えることが出来る。

1930 年代、ソ連はナチスのイデオロギー的脅威に対抗して、人類学者、生物学者にドイツの人種論を反証するよう指示した。ドイツは優生学的に「後進性」を遺伝、人種で説明したのに対し、ソ連は遅れた民族も環境や社会・経済的条件を改善することによって発展可能とする優境学的な民族論を確立させようとした[89]。1930 年代のソ連とトルベツコイの民族論は似通っているように見える。しかし、彼の考えは文化、民族の高低を前提とし、発展によって差異や後進性を克服できるとするソ連のマルクス主義的民族観とは異なる。ソ連では、人為的な格差是正、ある程度小さな民族を名目上の大きな民族に統合すること、全ての民族をマルクス主義的発展論（ヨーロッパ型の単線的発展論）の上にのせる諸民族の融合の促進があった。マルクス主義の理論は、ダーウィンの理論やトルベツコイが批判したような社会進化論の発想とも関連深い[90]。トルベツコイはマルクス主義という理念や階級的民族論の点でソ連と相容れなかったが、反ナチス的、優境学的民族論という点ではソ連と共鳴していたものと考えられる。本章で扱った「収斂」こそ、マルクス主義ではない方法で民族の差異を補う共通性を付与する点で、ソ連の民族政策を批判的に補完するものであった。

おわりに

急激に歴史が変化した時代にあったユーラシア主義が、新しいものに触れ、1920 年の当初には見られなかった思想の相貌を示したのは自然なことであった。1930 年代まで検討対象にすれば、政治だけでなく、文化・学問的な意味においても、この思想をスターリンのソ連とヒトラーのナチス・ドイツという両体制間の枠組みの中で捉えることが可能である。

注目すべきは、トルベツコイの同じ「収斂」という言語観が 1930 年代において、ソ連を前提としたユーラシア概念とナチス批判の両方の根拠となり、利用されたことである。トルベツコイが生活していたオーストリアはナチス・ドイツの影響を強く受けていた。系統が違う民族が収斂によって共通性を見出すという「ユーラシア言語連合」は明らかにナチス・ドイツのアーリア主義、ないしはインドヨーロッパ主義に対峙するものであった。また、ソ連との関係としては、トルベツコイやサヴィツキーは最後までソ連の統治者を支持せず、特に

88 *Трубецкой.* Письма к П.П. Сувчинскому. С. 364.

89 Francine Hirsch, *Empire of Nations: Ethnographic Knowledge and the Making of the Soviet Union* (Ithaca: Cornell University Press, 2005), pp. 222–223.

90 吉田文和「ダーウィンのアナロジーとマルクス：マルクス『機械論』形成史研究（6）」『経済学研究』33 号、1983 年、15 頁；佐久間孝正「マルクス・エンゲルスとダーウィン：ダーウィン書簡をめぐる問題」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』10 号、1982 年、12–13 頁。

民族政策に関して相違があった。収斂という理論を用いた「ユーラシア」概念構築の作業は、多民族国家ソ連への適用を前提として行われたと考えられる。ユーラシア主義者たちは反社会ダーウィン主義的な考え方を共有していたが、それはまた彼らの専門的とする学問の立場と、民族・文化・政治・歴史などに関する思想的立場とを結びつけるものでもあった。特に、トルベツコイの言語論における収斂進化論は、系統が異なる民族同士でも地理的な環境を共有することによって類似性や共通点を持ち得るという主張に結びつく点で、多種多様な民族を包括する思想であったユーラシア主義と密接に関わっていたと考えられる。しかし、社会ダーウィニズムの影響力や当時の時代状況に対抗するために、彼らがあえて「ユーラシア諸民族の間には闘争ではなく協調が存在する」というテーゼを学問的に根拠付けようとした可能性も考慮に入れなければならない。

本稿では、様々な同時代の現象へのオルタナティブとしてユーラシア主義が提示されていたことを論じてきた。特に、ボリシェヴィズムに替わる理念としてユーラシア主義が提唱されていく 1920 年代半ばから後半にかけて、ソ連国内でも、スターリンではない、例えばブハーリンという選択肢もあったかもしれない。ソ連という国家の方向性には様々な可能性が残されているという状況下で、亡命者であったユーラシア主義者も自分たち理念をソ連の一つの選択肢として提案した。

結局、彼らはソ連に影響力を持てず、望みは叶わなかった。しかし、その後もトルベツコイは、ナチス人種論に対抗しつつ言語学の研究を進め、政治的な意味ではない学問的な名称として、「ユーラシア」という言葉をソ連に対して積極的に使った。ユーラシア主義とプラハ言語学派の関係に見られるように、諸学問がユーラシア主義の形成に関わったのとは逆に、ユーラシア主義者のアプローチがそれぞれの学問に還元され、その学問の発展に貢献するという側面もあった。トルベツコイとサヴィツキーは、ヤコブソンをはじめとするプラハ言語学派と協同して初期構造主義の形成に関わり、G. ヴェルナツキー（G. Vernadskii, 1887–1973）は歴史学者としてアメリカに渡った後も活躍した。政治的敗残者であったユーラシア主義者がその後、学問で貢献したことこそ、ユーラシア主義の歴史的意義として評価すべきである。

ユーラシア主義は、時にはソ連の理念であるコミュニズムやボリシェヴィズムに、ある時はナチスの人種論に、最終的にはソ連の領域を指す別称、そしてアンチ・テーゼとして唱えられた。したがってユーラシア主義は、1920–30 年代を通して性質の異なる様々な顔を持った。これが多義的で曖昧な思想とされる理由であろう。確かに、ユーラシア主義は思想として一貫性や体系性がないように見え、まるで時代を映し出す鏡のように各時代の現象に反射していた受動的な思想として解釈することも可能である。しかし、オルタナティブとしてこの思想を整理し直すと、むしろトルベツコイら提唱者の関心に沿ってアンチ・テーゼや代案を打ち出していくという、より積極的な意味を見出すことができる。

ユーラシア主義者の特徴は、言語学、地理学、政治哲学、歴史学など様々な学問分野の専門家であったという、その学際性にある。彼らは、時には協力し合いながら、専門外の分野である生物学や人類学にまで踏み込むこともあった。それではなぜ彼らは、それぞれの知識を持ち寄り、結集したのか。その理由の一つは、政治、経済、文化、人間という広大な領域を覆うコミュニズムやナチズムの現象を分析し、それに反応することで、立ち向かうことにあったといえる。

Eurasianism as an Alternative: Linguist N. S. Trubetzkoy's Intellectual Reaction to the Soviet Union and Nazi Germany

Saito Shohei

Eurasianism was a movement created by a group of Russian émigré linguists, ethnologists, geographers, and historians in the 1920s and 1930s. Although the Eurasianists possessed no political power, their ideas have had a significant influence on a wide range of intellectuals, even to this day. The most famous member of the movement was N. S. Trubetskoy (1890–1938), a renowned linguist. While scholars have examined the political implications of Eurasianism in the context of the 1920s, this essay shifts the emphasis to the academic and theoretical development of Eurasianism from the late 1920s into the 1930s. The examination of this new turn that the Eurasianists went though during this period reveals new aspects of their movement. Trubetzkoy's linguistic ideas made a major contribution to determining the direction of Eurasianism. My approach to Trubetzkoy's Eurasianism with much attention paid to his non-political aspects could solve the question of why his social thought was called "Eurasianism" and not "Russianism." This essay shows that Trubetzkoy suggested Eurasianism as an alternative ideology to Bolshevism, an alternative racial theory to Nazi racism, and an alternative name for the USSR.

Trubetzkoy did not support the Bolsheviks during his lifetime. He rather sought to promote an alternative view to Bolshevik policy in many respects. His struggle with Bolshevism led him to forge the idea of Eurasianism. As far as national policy in the Soviet Union was concerned, Trubetzkoy recognized both the applicability and the limits of Eurasianism vis-à-vis the Soviet Union. He claimed that the Soviet assimilation policy was the opposite of national diversity, assuming that every national culture was equally valuable in its uniqueness. Strictly speaking, he disagreed with Soviet national policy, contending that an alternative ideology to Marxism was necessary. Trubetzkoy considered it possible to bring a variety of nations together with their every uniqueness preserved.

Accentuating cooperation among various races, Trubetzkoy's Eurasianism worked as a challenge to Social Darwinism. He was against the concept of the "the struggle for survival," as he found himself "socially and racially weak" as a Russian émigré in Western Europe. Social Darwinism was a theory of "the strong" at that time. In fact, in his letters to R. Jakobson, Trubetzkoy mentioned the racial discrimination he confronted in daily life. These letters and his article "On Racism" (1935) revealed that Trubetzkoy and his colleagues were already under pressure from the Nazis at that time. In this article, he criticized the Nazi's Indo-Europeancentrism and racial determinism.

In this essay, I attempt to define Eurasianism in the 1930s as an endeavor to create an ideal type of "Eurasia" replacing Bolshevism. The linguists Trubetzkoy and R. Jakobson and geographer P. Savitsky used a multi-disciplinary approach, applying concepts deriving from Neo-Lamarckian evolutionism to their social ideas concerning Eurasianism. This methodology stemmed from Trubetzkoy's article "The Tower of Babel and the Confusion of Tongues" (1923). Later, in his article "On the Indo-European Problem" (1937), his linguistic ideas clashed with the Nazi's racial and pseudo-linguistic theory that involved the concept of a "Proto-Indo-European language."

In the 1920s and 1930s, Eurasianism developed as a reaction against European intellectual trends, including Social Darwinism. Trubetzkoy's Eurasianism stood between the communism of the USSR and the fascism of Nazi Germany, not only politically but also academically and ideologically.